

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 26 日現在

機関番号：25502

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531077

研究課題名(和文)日本の子どもの発達資産に関する研究 - 国際比較調査を踏まえて

研究課題名(英文)Developmental Assets in Japanese Youth - An International Comparison

研究代表者

Wilson・Amy Dey (Wilson, Amy)

山口県立大学・国際文化学部・教授

研究者番号：20264971

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円、(間接経費) 1,110,000円

研究成果の概要(和文)：日本の若年層の「リスク行動」について回答を求めると同時に、家庭・学校・地域での人間関係を尋ね、「発達資産」(子どもの社会化を促すため、大人が提供すべき、または支えて育つべき能力や態度)との関係を明らかにしようとした。分析結果は、日本の大人が参考とすべき肯定的な若者育成の大変有力な指標になると同時に、これまでにアメリカを中心に300万人以上を対象として収集・分析されてきたデータとの国際的比較が可能となる。

質問票作成と調査実施に予定よりも時間を要したため、大幅な時間の遅れがあったものの、現時点で500名弱の高校生のデータを収集・分析中であり、今年度中に国際大会での口頭発表と論文投稿を予定している。

研究成果の概要(英文)：This research, based on the research of the Search Institute (Minnesota, USA) is groundbreaking in that it asks questions about youths between the ages of 11 and 18 directly about their high-risk behaviors - use of drugs, alcohol and tobacco, their sexual activities, and their relationships with their family, community, school and peers. It also asks questions about their positive behaviors and what Search Institute terms "Developmental Assets", a set of 40 supports that family, school and community should provide in order to ensure a youth's successful transition to adulthood and becoming active members in society.

Due to the length of the survey and the sets of difficult questions rarely asked directly of Japanese high school students, the survey measure took much longer to develop and implement, and data is still being input. It will be processed and reported on within the 2014 academic year, but initial results should be available by August 2014.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：発達資産 家庭教育 国際比較 子ども支援 Developmental Assets 国際情報交換 米国

1. 研究開始当初の背景

平成19年度から平成21年度までの3年間にわたり、科学研究費補助金「基盤研究C：家庭教育に関する国際比較 - 家庭教育実践プログラムの開発のための基礎的研究」を受けた基礎的研究を行った。日本における家庭教育（親子関係、しつけの内容や方法、学習意識や態度、子どもの進路期待等）が現実的にどのような問題と課題を抱えているのかについて、国際的な調査方法を用いることを通して、その特殊性と普遍性を明らかにすることを試みた（研究代表者：相原次男、岩野、ウィルソン、ヒギンズの4名からなる研究チーム）。研究結果として、子どもの成長と社会化に必要なとされる「発達資産」（米国：サーチ・インスティテュート発行）という指標を用い、さらには国連で承認されている「パーチャーズ・プログラム」や「フルサークル・ラーニング」が提唱する教育プログラムを参考に、日本社会における教育の在り方について考えることが有効であるとの方向性を得た。

2. 研究の目的

本研究は、40の発達資産という、子どもの成長・発達各段階で身につけることが期待される、または獲得することが望ましいとされる能力や態度（内的資産：internal assets）、またその支援体制（外的資産：external assets）に着目する。先行研究として行った基礎的研究（相原、ウィルソン、岩野：2010）を発展させ、発達資産のより詳細な分析を行うことが可能な調査方法を導入して、理論的にも実践的にも日本で応用可能な教育の在り方について探ることを目的とする。

具体的には、

先行研究で行った、40項目の発達資産についてその概要や傾向を把握するための Developmental Assets Profile（以下DAP調査）の結果をもとに、これをさらに進化させた Attitudes & Behaviors Survey（以下A&B調査）に取り組み、一つひとつの発達資産を詳細に検証する方法について検証する。

A&B調査をもとに、日本の家庭や地域でも活用できる発達資産の指標を示し、世界の子ども達と比較して日本の子ども達に優れている点や欠けていると思われる点について明らかにする。

多面的な価値観が尊重されるとともに、国際的な競争や協働が求められる今日にあって、特に日本の子ども達に不足すると考えられる発達資産を増やすための教育の在り方について考察を試みる。

3. 研究の方法

家庭教育に関する国際比較調査（A&B調査）の実施に向けて、調査票の翻訳やパイロ

ットスタディー、理論的背景となるテキスト類の翻訳等を行う。

A&B調査を実施し分析を行って、日本で活用できる発達資産の指標づくりを試みるとともに、その理論的背景となるテキストの翻訳を完成させる。

発達資産を増やすため教育の在り方について、北米や国連等で提唱されている実践的方法から日本で応用できるものをまとめたプログラム提案を行う。

4. 研究成果

今回の調査では、総合的な質問項目を用いて、11歳から18歳までの日本の若年層の「リスク行動」（タバコ・飲酒・麻薬の利用・性行動・非社会的行動など）について回答を求めると同時に、家庭・学校・地域での人間関係を尋ね、「発達資産」（子どもの社会化を促すため、家族・地域・学校にいる周りの大人が提供すべき、または支えて育つべき能力や態度：エンパワメント（与力感）・価値観・自己肯定感・安心感・時間管理能力など）との関係を明らかにしようとした。分析結果は、日本の大人が参考とすべきポジティブ・ユース・デベロップメント（肯定的な若者育成）の大変有力な指標になると同時に、これまでにアメリカを中心に300万人以上を対象として収集・分析されてきたビッグ・データとの国際比較が可能となるであろう。

A&B 調査実施について：

調査実施時間の長さ（約50分）と質問の難易度の高さもあって、質問票作成と調査実施に予定よりも長時間を要したため、大幅な時間の遅れがあったものの、現時点で500名弱の高校生のデータを収集・分析中であり、今年度中に国際大会での口頭発表と論文投稿を予定している。

テキスト翻訳について：

現在実施中で、今年度中に部分的に投稿する。

実践的な家庭教育について：

肯定的な子どもの育成プログラム：平成24年度～26年度にわたって、「中学生の本音を聞く会」や中学生と大人がお互いの話を聞きあうワークショップ、高校生・大学生・子育て支援に携わる仕事をする大人の話し合いを複数回実施している。

ポジティブ・ユース・デベロップメントを促すためにサーチインスティテュートが提示している「40の発達資産」を、より多くの人に活用してもらうため5つのアクション・ストラテジー（行動戦略）を提示している。これらの5つの行動戦略（大人を巻き

込む、子供を巻き込む、団体、組織を活性化する、行政に働きかける、（メディア等を利用して）社会制度に働きかける）をその順番に実施することにより、アメリカ各地の地域社会全体を変えることに成功した例をいくつもあげられる。

それに比べて、日本では少子化と共働き核家族の課題に向けて、学校、行政、地域などが多大な努力をして、子どもを守り、支援をしている様子がたくさん見られる。しかし、そのなかには、行動戦略の「子供を巻き込む」という部分は殆ど見受けられることがなく、ほとんどの場面（家庭、地域、学校、行政）では、親・地域リーダー・学校教職員・行政の方たちが子どもの意見なしで支援対策などを決めている。中学生から大人の第一歩として踏み出し、せっきく子どもの特有な意欲、想像力、活力があり声を出したいのに、「受験がある」、「クラブ活動で忙しい」、「まだ子どもだから」という理由で、力を発揮できる場が与えられていない。その一方、大学生になると「社会力」が求められて、就職のためのスキルを育成させようとするため、体験学習、グループ・ラーニング、コミュニティ・サービスを求められるが、そのためには、子どもの頃からその能力を育成する必要がある。これからの子ども支援は、子ども無しではなく、一緒に考えて行くべきであると考える。

2012年2月、山口県家庭教育学会創立10周年研究大会において、「今、子どもたちから求められている支援は」と題してグループディスカッションを活用して、中学生の率直な意見を聞くことと、大人の感じている子どもの課題と解決策について考えた。目標としては、子どもと大人との対話の中でお互いの認識の改革（お互いに持っているイメージを改めること）と、大人（家庭・地域・学校・行政）が子どものために支援すべきところと一緒に考えることである。



ワークショップには子供5人（地元中学校から男性2人、女性3人）と教育関係者、子どもの育成に係る仕事をしている大人を中

心に15人が参加し、子どもグループ1つと大人グループ3つに分かれて作業を進めた。



まずは、それぞれのグループに「理想の青年像」を考えてもらい、考えた青年の特徴（態度、能力、価値観など）を一つずつメモ用紙に書いて、説明しながら模造紙に張った。すべてのメンバーの説明が終わったら、メモをグループ化し、それぞれのグループに名前を付けた。

模造紙にグループ化されたメモを比較するために、それぞれのグループが各テーブルを回って、ゆっくり確認してから、お互いの感想を教えてもらった。大人からは「子ども達がこんなことをすでに考えていることに驚いた」という意見があった。それに対して、子ども達からは「大人と似たような結果が出て安心した」という意見があった。また、他のグループの出した特徴に納得する様子が見受けられた（例「お金」：金銭感覚を育てていることが大事ですね、「子ども達の『人



生を楽しむ』ことはそのとおりですね」等）。

次に、先ほどリストアップしてもらった特徴（態度、能力、価値観など）を育成するためには、大人たちはどのようなことができるかということを考えた。また、それぞれの支援対策を「家庭」、「学校」、「地域」、「行政」に分け、またその中の組み合わせを明確にするため、メモ用紙に書いてもらった。出来上がったそれぞれの模造紙を黒板に張って、全体を見渡せるようにしてから、中学生にコメントを求めた。

中学生のコメントの中で印象的だったのは、「たくさんの大人がこれほど熱心に子

も達のことについて考えていることについてとても驚いた」ということだった。同時に、大人のコメントをみると、「子どものしっかりしている答えとか、大人なみに考えていることについて驚きがあった」などがあった。お互いのイメージにギャップがあることが明らかになり、もっと大人と子どもと一緒に考えて行く必要があると確認できた。

最後に中学生に「もっと大人にしてもらいたいことや、訴えたいことはありますか」と聞いたところ、「もっと大人として扱って欲しい」という意見があった。昨年度開催した複数のワークショップでも同じコメントが出た。また、大人に最後にコメント・感想を求めたところ、子ども達をより新しい目、尊重する目で見ていた様子が見えた。

これから A&B 調査の分析結果を踏まえて、PTA などをとおして、親子でできるワークショップなどを開発していく予定である。



5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

— ウィルソン A. & 岩野 M. (2013) Getting it straight from the Source - An Investigation of Developmental Assets as seen from the eyes of youth [子どもの本音を聞く：子どもの目から見た山口県の発達資産の状況について]。山口県立大学学術情報、第6号、87-98頁。(査読無し)

— Higgins, M. & Wilson, A. (2012) Linking Global Research to Local Practice - Building channels and meeting the challenges in Japan [グローバルな研究とローカルな実践をつなぐ：日本での挑戦との出会い]。山口県立大学学術情報第5号、53-63頁。(査読無し)

〔学会発表〕(計1件)

ウィルソン, A. (2013) 「今、子どもたちからもとめられている支援は」、山口県家庭教育学会第10回研究大会、2013年2月、山口県山口市。

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

40の発達資産ホームページ

<http://40assets.ypu-kokusai.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

ウィルソン、エイミー (Wilson, Amy)
山口県立大学・国際文化学部・教授
研究者番号：20264971

(2) 研究分担者

岩野 雅子 (Iwano, Masako)
山口県立大学・国際文化学部・教授
研究者番号：70264968

(3) 連携研究者

()

研究者番号：